

アナログは心ときめく

ライター・写真家 赤城 耕一

およそこの10年ほど、本業のカメラマンの仕事以外に、デジタルカメラ、フィルムカメラ、クラシックカメラに関するインプレッション記事を、カメラ専門誌を主に発表し続けてきた。

もともと私自身がメカニズム好き、カメラ好きということもあって、それが嵩じてカメラマンになってしまったという経緯もある。少しだけ偉そうに言うなら、カメラが好きになったことをきっかけとして、本来の「写真」に目覚めたというところもあるから、こうした記事をきっかけとして、ひとりでも多くの人が写真の面白さに目覚めてくれたら、これほど嬉しいことはない。

さて、ここ数年来のデジタルカメラの発展はすごいものがある。高画素のモデルが次々と登場し、少し前まで語られていたフィルムとの画質比較など、まったく無意味と思えるほど画質が向上した。市場ではすでにカメラはデジタルが普通ものという感覚になりつつあるようだ。カメラ付き携帯電話も猛烈な勢いで普及している。

したがって、フィルムカメラの新型モデルはほとんど登場することはなく、市場も縮小される傾向にある。二〇〇二年度はついにデジタルカメラの出荷台数はフィルムカメラのそれを抜いてしまった。フィルム



2002年に登場したライカM7。絞り優先AEを採用し、便利になった。デザインはライカM4ゆずりのもので、外装カバーには真鍮が採用された。全体のフォルムはM4とあまり変わっていない。

まだ現像の仕上がりを
を見る時はドキドキも
のである。

ただし、プライベート
で撮影する場合はほと
んどフィルムカメラ、これ
も大半がアナログ操作の
クラシックなメカニカル
カメラを使用する場合
が多く、しかも詰めてい
るフィルムはたいがいモノ
クロである。つまり徹底
したアナログ写真を趣
味としているのだ。これ
はデジタルとはまったく
異なり、アウトプットさ

れるまでのゆっくりとした時間の
流れを、「ネガ」という実体に手を
触れながら暗室の中で光と戯れ
ようと考えているからだ。

デジタルカメラは数百万という
価格のプロ業務用のものもあれば、
数千円のオモチャカメラまである
のだが、そのほとんどは価格の高
低にかかわらず、製品寿命が極
端に短い。中には新型カメラの
インプレッションレポートを書いて
いる時に、もう次機種の改良モデル
のウワサが流れてくるなどという
バカバカしい経験をしたこともある。
もちろんデジタルの撮像素子
自体がまだまだ発展途中にあるも
のなので、新型カメラは改良され、
確実に性能が向上しており、その

画質も日々向上している。はつき
り言えば新しいカメラのほうが
よく写るし、デジタルカメラが好
きな人は常に最新のモデルを求
めたがる。これはパソコンと似てい
るところがあるが、旧製品はまっ
たく価値がなくなり、ゴミ扱いに
なる場合もある。

逆にフィルムカメラは新製品の
登場が少ないくらいだから、製品
寿命が長い。これにより長期間愛
される資質を持つていないと、評
価の対象にはならないし、ファン
も納得しないのだ。

フィルムカメラはカメラを新型
に取り替えても出来る上がる写真
の画質自体はほとんど変化はな
いわけだから、カメラそのものに
魅力があり、使う人に充足感を
与えてくれるものでなければな
らない。

つまり、機能のみばかりではな
く、ボディの質感や操作感、
作動音にいたるまで、写真の写り
とは直接関係ないところ、道具と
しての緻密性までもが細かく評
価対象になるのがフィルムカメラ
なのだ。

道具としてのフィルムカメラの
完成度の頂点をきわめたものに
ライカがある。我が国では、一眼レフ
よりも、クラシックな距離計方式
を採用したMシリーズとよばれる
タイプのライカが有名で、高い人



1960年代中盤に登場したライカM4。私が最も好きなライカである。長年の使用のためボディ下部は真鍮地が露出してしまっている。全体の印象からすれば、満身創痍だが性能的には何ら問題なく、道具としての迫力すら感じさせる。



ライカレンズで最も人気のある広角、ズミクロン35ミリF2。このレンズも材質は真鍮製で小型だがずしりと重い。もちろん描写性能は抜群で、現在のレンズにはない味があり、人気の高いレンズである。写りと趣味性が兼ね備えられた逸品である。



ニコンS4。国産のカメラの代表ともいえるニコンのカメラも以前は真鍮カバーを採用していた。装着レンズは最近になって注目されている光学メーカー、(株)コシナのフォクトレンダーブランドのもので、現行品。古いマウントのカメラ、レンズを製造し、注目を集めている。レンズ鏡筒の材質は真鍮が採用されている。



ライカM4のフィルム巻き戻しクランク。常に手に触れる部位なので、塗装が剥がれやすいが、それもまた「味」である。細かなところまでエングレーブされた刻印が美しい。クラシックカメラは無駄ともいえる細かなところまで、気をつけて製造されている。

気がある。機能的にはデジタルカメラどころか、一眼レフよりも著しく劣るのに、いまだ現役であり続けるところが凄いが、このことがカメラの評価は機能だけではないということをも裏付ける所以となっている。

Mシリーズのライカで最も最新のカメラは二〇〇二年に発売されたM7というモデルで、自動露出機能が搭載されている。自動露出機構そのものは国産のカメラで言えばすでに30年以上前の技術であり、何ら珍しいものではないのだが、M7になつて、やっと搭載されたのである。カメラ操作が自動化されることは、カメラを魅力的にみせるための大事な要素と普通は思うのだが、ライカの場合は前に書いたように、ファンは機能の発展のみを強く求めているわけではない。

M7のもうひとつの「売り」はボディの材質が真鍮製になったことだ。ライカは誕生のころからボディの材質は真鍮製だったが、どういうわけかここ20年くらいに登場したモデルは亜鉛ダイキャストを採用していたのだ。もつとも最近のカメラ外装の素材はエンジニアリングプラスチックが主流で、その強度は金属製に優るとも劣らないが、やはり質感ではかなり劣るし、使込んでいっても味が出てこない。

真鍮製のボディは手触りも抜群だし、金属質感がすばらしい。長い期間使い込んで、ボディの角から塗装が剥がれたり、キズがつくと、地の真鍮が露出しはじめ、道具としての凄みが出てくる。時間を経るごとにこの凄みは増してくるわけで、これがカメラマンと共に過ごした時の長さをあらわし、経験を示すための尺度となる。

M7も長く愛される道具として企画されたため、ボディ材質には真鍮が採用されたのであろう。

ライカはコレクションカメラとしても、重要な位置にあるので、使われずに大切にしま込まれ、真鍮地を二生見ることがないという人もいるが、これでは写真を撮るために生まれてきた道具としては可哀想だ。私が所有する古いライカのほとんどは、塗装が剥がれ、真鍮地が思いつき露出してしまっているけれど、私はこれをかえって誇らしく思うのだ。

ただし、問題はその真鍮地の露出のわりには、なかなか自分の気に入った作品を創ることができないことだが、もちろんこれはライカには一切責任はない。

赤城 耕一氏 略歴

あかぎ こういち



写真家。

1961年東京生まれ。東京工芸大学短期大学卒業。出版社を経てフリー。ルポルターージュからポートレート、コマーシャルなど撮影分野は選ばず、活動の分野は広い。根っからのカメラ好きのため、使用しているカメラは最新のデジタルカメラから70年前のライカまでと、全く選ぶことがない。

「アサヒカメラ」(朝日新聞社)「季刊クラシックカメラ」

(双葉社)などで、新型カメラインプレッション記事、メカニズム記事を担当している。とくにカメラを情緒的に語るのには得意。著書には「使うM型ライカ」「使うベッサ」(双葉社)「定番カメラの名品レンズ」(小学館)「ドイツカメラへの旅」(東京書籍)など。